
婚約者は勇者さま？

伊吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

婚約者は勇者さま？

【Nコード】

N0223X

【作者名】

伊吹

【あらすじ】

勇者の剣に選ばれたみたい。いつものごとく厄介事巻き込まれ体質の幼なじみが爆弾発言を落としてくれた。これ幸いにと王国へ売ったはいいものの、どうやら物事は予想外の方に転がってしまつたようで――？ 勢いとノリだけで進んでいきます

「ごめん、もう一度言ってもらってもいい？」

「いや、だから」

——勇者の剣に選ばれてしまったみたい。

月に一度の王都への旅路についてきたいといった、幼なじみ兼婚約者のデューイはふらふらとどこかへ消えて、曩廩の宿へ戻ってくるなり爆弾発言を落とした。

「ごめん、デューイの言ってる意味がわからない」

「俺もちよつと混乱してるんだけど」

ちらりと後ろを振り返る。見ないようにしていたその人たちをついには視界に入れてしまふ。ああ、完全なる厄介事に巻き込まれてしまつてる。

みるからにきらびやかで、私たち庶民とは住む世界が違う人種。絹の衣服など見慣れてはいるものの、それは商品としてであり、実際に着ているわけではない。

商人の娘に生まれてそれなりに審美眼を磨かれていればそれが最高級の質であることがわかる。ウチで扱っているものよりはるかに高い。

「デューイ様」

「ああ、うん。でも今俺はストーニー家に厄介になつてる身だから」
今、世界情勢は傾いていることは知ってる。どここの国が理由もなく戦を仕掛けたとか、魔物が頻繁に街に現れるだとか、最終的に魔王が復活したからだ、と声を上げる一派がいることは巷に流れる噂で知ってはいた。私には関係ない、遠くの話として話半分に聞いているだけ。

「タケル様の再来を待つとか言ってたねー」

王都に来るなり、その噂が持ちきりだった。数百年前に現れた最

後の勇者の名前があちこちで聞かれていた。どうやら神殿のお偉いさんが、神の啓示を聞いたとかなんとか。勇者の剣、つまりは歴代の勇者が使用していた剣が再び現れるとかなんとか。

はつきりとデューイに起きたことを悟ってしまっただけで呆れてしまった。厄介事巻き込まれ体質もここまできちゃうか、と。

「サラ、どうしよう」

「どうしようと言われても。お偉いさまには逆らえないでしょう」

「そう、なんだけど」

「デューイ様」

再び、急かすように名前を呼ばれてデューイは振りかっつて、もう一度私を見た。

「サラも一緒だったら」

「え、ちよつと待ってよ。今回はお父様いないんだから」

今回のストーニー商会の代表は私、サラ・ストーニーであり、今後のためにと婚約者であるデューイが付いて来ていた。商談もこれからというところなのに抜け出せるはずもない。

「恐れ入りますが、このご令嬢とデューイ様のご関係をお聞きしても？」

「ああ、そうだった。俺の婚約者のサラ・ストーニー。ストーニー商会の一人娘って言ったらわかるかな？」

「婚約者、ですか」

肩を抱くな、肩を。馴れ馴れしいデューイの仕種に、腕を払いのける。何やら思案顔のお偉いさんをよそに思わず叫ぶ。

「デューイ！ 前々から言いたかったんだけど、確かに私たちは婚約者だけど、その巻き込まれ体質をどうにかしてくれないとウチの損失につながるのよ！ 悪いけど、今回の同行でその損得を見るようにいわれてるんだからね、このままじゃ……」

右手で首を切る動作をする。

「ええ！ ちよつと待ってよサラ、」

「それはようございました！」

今にもすがりつきそうなデューイを止めたのは割り込んできたお偉いさん。というか、あなたはどこの誰ですか。

「申し遅れました。わたくし、神官を務めておりますマルイと申します。僭越ながらこのたび神の啓示を受け、きたる花見月の三日に現れるお方、つまりはデューイ様をお待ち申しておりました」

ここぞとばかりに言葉を重ねるマルイ様に私も思わず、引いてしまふ。神に愛される神官らしく見目麗しい青年がぐぐいと近づいてくる。

「陛下に置かれましては、デューイ様に魔王討伐をお願いしたく、ひいては姫様の……。いえ、なんでもございません。勇者の剣がデューイ様を選ばれたことはすでに城の知るところ。別れを惜しむ気持ちもわかります。ですが、姫様、いえ城のみなはデューイ様をお待ちになっておられます」

つまりは道草食つてないで早く登城しろ、と。んでもって勇者に女はいらん、と。姫様のお相手になれ、と。

わお、すごく厄介事に巻き込まれてる。このままじゃいらぬ巻き添えをくいそうだ、と商談で培われた感が冴えわたる。

「マルイ様、こんな顔だけの頭の足りない男でよろしければどうぞ、お連れになつてください」

「サラ！ 顔だけって！」

突っ込みどころがそこだから顔だけの頭の足りない男なんだって！ このままデューイと添い合ったら確実にストーニー商会はつぶれてた。よかったよかった。

一安心している間に、勇者様、勇者様、とそろそろと王国騎士団の制服を着た人たちがデューイを囲んで部屋からいなくなった。

きっと、周囲を巻き込みながらあれよあれよと魔王討伐を成してしまうのだろう。デューイという人間はそういう星の付きに生まれてきた。だからこそ、私の、ストーニー商会の跡取りとして婚約者になったんだけど。お父様、見る目だけはある。

「さすがに王国相手には逆らえないものねー」

「お話がはやくて助かります。さすが、サラ・ストーニー様ですね
どうにもこうにも胡散臭い神官とその護衛と思われる青年の2人
だけが残される。」

「ということで、顔だけの頭の足りない男より、顔も頭も地位も金
もある男はどうです？」

ん？ 手を取られてどこかの貴族様を相手にするような、手の甲
に感じる柔らかい感触に、ぞわぞわつと背筋になにかが這い上がる。
あれ、なんか予定と違うかも？ 考えがまとまらないまま、それ
では、と背を見せ踵を返す神官の青年。

「ご愁傷さまだな」

神官の後に続く前に意味深な言葉を残す、眼光の鋭い護衛の青年。
これから起こる嵐のような荒れ具合を頭のどこかで察知したのか、
私は身震いしてしまった。

00（後書き）

勇者とか幼なじみとか読んでたらついつい書いてしまった。
一応短編扱い、続くかどうかは……。

恋愛っぽいけど、これだけじゃ無理だろうってことでファンタジーカ
テゴリで。

20111031 修正

「そうそう、タケル様の再来と言われている新しい勇者様のうわさをご存じか？」

商談を終えたあとの緊張から解放されたところに放り投げられた話題に一瞬固まる。最近、この手の会話を数えきれないほどしたなあと思いながら。

「残念ながら、私田舎者ですので噂にはあまり……」

それどころか婚約者だったけど、と内心盛大に突っ込みながら何も知りません、と貫いてみる。

「おやおや、ストーニー商会でもつかめぬ情報となれば……王家も侮れないとみるかはたまた単なるうわさに過ぎないのか」

先日、勇者様勇者様とデューイを担ぎ上げていった騎士たちの姿は記憶に新しい。にもかかわらずいまだ噂の域を出ていないところを見ると首を傾げざるをえない。

徹底した情報規制の裏にあの得体のしれない神官がいるんだろうなあ、と遠い目をする。帰っていく商談相手を見送って、部屋に戻ると噂の神官さまが優雅にティーカップを傾けてらっしゃる！

「不法侵入ですよ」

突っ込むのは体力の無駄だところ数日で学んだ。神出鬼没の神官さまは神に愛されたことで付随してきた能力を己の欲求のまま使いまくっている。

「デューイ様のお披露目が正式に決まりました、それに伴い姫様との婚約も」

「ぼつと出の勇者を姫様の婚約者とするのはあまりに無謀なんじゃ」

商談だつてそうだ、正式な保証書がある高貴な商品も信用の置けない見ず知らずの人間が持ってきたら疑いたくもなる。

「それには及びません、デューイ様ですから」

「ああ、デューイだもんねえ」

デューイの持つて生まれた星を思えばいつい同意してしまう。
きつと姫様は落ちているんだろつなあと城を眺める。

「勇者のお披露目とともに魔王討伐のメンバーが決まりましたので、
あいさつにと」

ん？ 挨拶つて、なぜに私に。疑問が飛び交う私を置いて神官さまは
まはいとも簡単に告げてくださった。

「テオトバルト、ヨシユカ。まあこの2人はいづれお目通りすること
とまございましょう。そして僭越ながらこのマルイ・ヨシカワ。精
一杯、デューイ様に仕えさせていただきます」

勇者へ忠誠を誓っているにも関わらず、いつのまにかティーカッ
プをその場に置き、部屋の入口で固まったままの私の前で跪いてそ
の手を……。

ぞぞぞと背筋にうすら寒いものが走る。文字通りその場に置いた、
ティーカップが自然とテーブルへと降りていく様子にも、手の甲に
感じるいつかの記憶も、そのすべてがあたしの琴線に触れる。

なにか違う、と心底そう思った。

「お待たせしました、サラ様。さあ行きましょう」

そんなやり取りから数日経って、いったい誰がこの状況を想像で
きただろう。きつとあの胡散臭い神官さまだけに違いはない。

01（後書き）

続いてしまいました（笑）

気持ちの良いほど晴れた日、王都はいつも以上に活気があふれている。神官さまが言っていたお披露目が本日王城で行われるらしい。予定されていた商談をすべて終えた私はそんな活気溢れる王都を去る予定。

行きとは商品も同行者も1人減ってしまった一行はなんだか力がない。

デューイは良くも悪くも私たちの中心だったし、なによりあの顔だけ男がいれば華がある。落ち込む女性陣はわかるものの、どうしても御者の彼までも落ち込むのか。まあ老若男女問わずのデューイだけあると納得しとこう。深くは考えない、考えたくもない。

王都から伸びる街道をゆっくりと進んでいるうちにドン、と大きな音が響く。振り返れば、王都の上空に上がる花火が見えた。

「そろそろかしら」

何事かと、街道を進む馬車が一樣に止まり王都上空を眺める。もやもやとなにかが、と思っっているうちにそれは映し出された。

魔法によって空に映し出されたスクリーンに映るのは王城のバルコニーで手を振る元婚約者のデューイと王家御一行さま。あの神官さまと目つきの悪い護衛の騎士と女性が1人、きつと魔王討伐メンバーとやらの違いはない。

姫さまがデューイを見上げては頬を染める様子がはつきりと見えて、やっぱり、と思う。そして促されるまま、その手を姫さまの肩に回しているデューイが映る。

「デューイ様ですねえ」

「姫さまと婚約するらしいわ」

「え？」

私の言葉にびっくりしたのか、隣に座る侍女は隠すことなく視線

をくれる。

「なあに？ どうしたの？」

「いい、のですか？」

「え？ どういう意味？」

空に映る2人に見入っていた私は、その言葉に首を傾げて侍女に向き直る。数秒の沈黙があったけど、それ以上彼女はなにもいうことなく空へと視線を戻した。

声までは届かない魔法のため、何を話しているのかはわからないけれど、討伐メンバー唯一の女性の口元が何かを呟き手に持った杖が力強く地を打った。

きらきらひかる光の残像の中、残されたのは王家御一行さまと、届くはずのない声がきつと更なる歓声へとつながった様子だけ。

そして、目の前に現れた勇者さま御一行。

「お待たせしました、サラ様。さあ行きましょう」

静かに映像を見つめていた街道に、突然現れた4人に一気に騒がしくなる。

デューイと神官さまと眼光の鋭いあの騎士と身の丈ほどの杖を持った女性。今のいままで空に映し出されていた人たちが現れ、混乱が巻き起こる。

その中で、何にも動じず私を見つめる神官さまは胡散臭い笑顔をその顔に張り付けたままのたまう。

誰もあなたたちを待っていませんでしたけど。悲しいわたしの叫びは三度感じる手の甲への口付けによって言葉として紡がれることはなく。

魔法使いの女性がつぶやく声が意味は聞き取れなくとも今度ははつきりと聞こえた。そして再度杖で地面を打つと目の前がきらきらと光って、その場に座っているはずの馬車が心もとなく消えていく感覚がした。

辺境の地にて持てるだけの贅沢で領主が勇者さま御一行をもてなすのは昨夜のこと。

ここはどこ、なんて答えを聞きたくない私は言葉に出すのもおぞましい。

神に愛された見目麗しい神官さまに三度軽い口付けをされたあと、一気に視界が白くなつたと思つたら、今までいた街道はどこにも見えず、目の前に広がる長閑な風景に呆気にとられた。

座っていた馬車の椅子が消えたため、身体を支えるものがなくなり手を取る神官さまに抱えられていたのにも驚き、暴れて、ぐらりと視界が揺れた。

「もしかして、酔われましたか？」

地面へ私を落とさなかったのだけは褒めてあげよう。しかし、酔うとはいったい。

「初めて転移される方にはその身にまわりつく魔力に気分を害したり、身体が構築されなおすことに違和感を覚える方がいるのですよ。それを総じて私たちは“酔う”と言ってます」

疑問を浮かべた私に反応してか、真つ先に魔法使いの女性が答えをくれる。しかしまた、どうして。

「いきなり村の中に出てしまったら村人が驚きますし、同じ地点に人がいれば存在が消滅してしまいますからね」

そんな話はどうでもよくて。いや、存在が消滅ってかなり恐ろしいこと言ってるけど！ どうして、私が。

「だって、サラがないと」

今のままでデューイがいることを忘れていた。この神官さまの存在感が大きすぎて忘れてしまう。

そして、そのデューイの一言で、幼いころからデューイに振り回

され続けて磨かれた状況の背景を読み取る能力とでもいうのか、ピンと来てしまった。

「わがまま……」

「お話がはやくて助かります、サラ様」

どこかで聞いた言葉に脱力する。けど、けど！

「勇者の旅立ちっていえば、城下町の人々に盛大に見守られながら、パレードみたいな感じで旅立つでしょ、普通！」

「いやですねえ、サラ様。一体どこのおとぎ話ですか。徒歩、まあ最低でも騎馬でしょうけど、そんな進行速度の遅い旅ではいつたいいつに成ったら魔王討伐ができるというのです。転移という素晴らしい魔法があるのですから、そんなお金も時間もかける必要がどこにあります」

お金も時間もかける必要とは、身も蓋もない言い方、それが貴族つてものでしょう、と言いたくなる。

「今日はこの領主の館で泊まらせてもらいましょう。明日の、そうですね、お昼前には立つことにしましょう。領主のゴルディ殿には連絡が入っているはずなので、さあさあ行きましょう。デューイ様、くれぐれもゴルディ様の愛娘に手を出さないよう……いえ、話をしないように」

帰る、という選択肢はすでに残されていないとわかっていても周囲に目を向ける。魔法使いの女性には気まずげに目をそらされてしまった。護衛の剣士には感情のこもらない目を向けられただけで終わった。

ここにいるのは私と神官さまと勇者の剣を佩いたデューイと護衛の剣士、魔法使いの女性の5人。どうやらここには私の味方はいないらしい。

神官さまの冗談の含まない目でデューイへ話した注意が城で起こした面倒事を簡単に察せられてため息をついた。

「サラ、お腹減ったね」

おいしい料理があるといいんだけど、とこの雰囲気を知っている

ないのかデューイは続けた。この能天気な元婚約者の幼なじみを見て、もういちど深いため息をついた。

03（後書き）

ハイ、超特急で進みます。
だって中編程度で終わりますもの。

「じゃ、行ってきます」

「はい、いつてらっしゃいませ。デューイ様」

背後から甘ったるい声が追ってきた。案の定というか、なんというか。昨夜の宴でデューイを一目見たこの館の愛娘、ユリス嬢はいつも簡単に陥落なさってしまいました。話しかけずともその効果が発揮されると身を以て知った神官さまは頭を抱えていらっしゃる。わたしは知っていたけど。そしてその元凶たる勇者さまと言えば、どうやら昨夜お楽しみだったらしい。

今朝、朝食前にわたしを起こしに来たのは館に勤める侍女ではなく、ユリス嬢であり、「同じデューイ様を愛するもの同士、彼を支えていきましょう」と昨夜の名残が艶っぽい表情でのたまった。

いろいろおかしいところはあるけれど、いいのか、子爵令嬢！ 貴族ってこわい。改めてそう思う。

勘違いしてほしくないけれど、わたしとデューイはそんな関係ではない。デューイに好意を寄せる女の子を星の数ほど見てきたけれど、どうにもこうにもわたしとウマが合いそうにない。デューイ至上主義とでも言うのか、デューイのやることなすことすべて肯定してしまうのだ。つまりは、男の夢、とやらが形成されていた。

よくよく考えると、お父様の言いつけとはいえ、よくこんな男と婚約交わしてたな。

「サラ？」

「あんまり、迷惑かけないでよ」

わたしの言葉の意味を分かりかねるのか、首をかしげる。非公式ではあるとはいえ姫様と婚約を交わしている身であっちへふらふらこっちへふらふら、フェロモンを垂れ流しにするのはよろしくない。とはいえ、今までの経験上、複雑なことにならず、すべて収まると

ころに収まってしまおうと知っているのだけれど。

「さ、おしゃべりはそれくらいにして。とつとと魔王とやらをぶちのめして差し上げましょう」

神官さま、心の声がこぼれてますよ。教えて差し上げたいのだけど、護衛の剣士のテオトバルトさんが無言で首を振るのが見える。何も言わないほうがいいですね。

昨日の宣言通り、どこかにピクニックでも行くような装いでお昼前に館を発つ。いまだに背後にはきらきらとデューイを見つめる甘ったるい視線が追ってくるものの、誰もそれを気にしている様子はない。デューイはともかく、神官さまはあえて見えないふりをしているような。残り2人は興味がなさそうだ。

「ヨシユカ、面倒なので一足飛びに魔王城まで行きましょう」

それでいいのか、魔王退治！ 庶民に伝わる勇者の魔王退治物語とは天と地とも離れたこの流れに啞然とする。そもそも、勇者の剣に選ばれたデューイや剣士であるテオトバルトさん、大掛かりな魔法をいとも簡単に行うヨシユカさん、そして言わずもがな、ヨシカワを名乗る神官さま。この人たちのなかに、ちよつと人より商才のあるくらいのが混じって魔王退治に行くこと自体おかしい。

「そうですね、3日も離れてるとロイが新しい女の子を捕まえてもおかしくないですし」

「何を言ってるんです、ヨシユカ。ロイであれば……」

「1日で十分だ」

なんだろう、この息の合った間抜けな会話は。ロイってだれ、そんなに節操のない男なんだろうか。

再び、自分の身体が心もとなくなる。存在がなくなるような不思議な感覚に、ああまた身体が構築されなおされるわけね、と思いつく。

当初のイメージとはかけ離れ、豹変したヨシユカさんの反芻するには下品すぎる言葉を聞きながら目を閉じた。きつと次に目を開けた時には噂の魔王城にいるのだろっ。

04（後書き）

詳しいことは一切書かずに勢いとノリだけでお送りしております。

なんだろう、この脱力感。わかってはいはいたけど、ありえない予想と高をくくっていたにもかかわらず、こつもその通りに進んでしまったこの現状に突っ込む気力すらない。

「ということで、デューイ様。あなたはまあそれなりに剣を振るってくださってればいいので」

わかつていたはずだ。うん、幼少期よりデューイと付き合ってきたんだし、デューイが剣を持ったことがないことくらい。それでもそれでも！ 勇者の剣に選ばれて王城へ行った数週間に瞬く間に剣の腕が上昇した、と思いたかった。だってそれが勇者つてもものじゃないのー？

「うん、サラと一緒に邪魔にならないようにしとくね」

どう考えても勇者の発言じゃない。顔が引きつるのがわかる。というか、目の前に敵意あらわにしている魔王と呼ばれる存在がいるにも関わらず、この会話をのうのうと続けられる精神をほめたたい。神官さまもデューイもどこかおかしい！ まわりがぼんぼん火を上げて壊れているというのに！

「サラ様、ご安心を。ヨシカワの名に掛けて、あなたには傷つけさせないと誓います」

慣れてしまった手の甲への感触にわたしは啞然とする。テオトバルトさんもヨシカさんも魔王へと立ち向かっているにもかかわらず、この神官さまは自身で張った安全な結界のなかで、デューイに言い聞かせながら、わたしに場違い（でもないかもしれない）なことをおっしゃる。

「さあ、さつさと帰りましょう」

デューイは、安全な、といってもこの敵地に安全な場所あること

自体神官さまと魔王との力の差は歴然としているのかもしれないが、結界の中で剣を振るう。剣が届く前に魔王の配下である魔族は結界に阻まれ消滅しているのだけれど。おめでたいデューイは知らず喜んでいる。

ああ、デューイ。あなたは変わらないわね。

結界の中から悠々と抜け出していった神官さまに目を移して、まばたきを数度する。

「マルイ！ いい加減真面目にやれ」

「そうですマルイ様！ はやくロイのところに戻りたいんですっ」

「まあまあ、デューイ様にはそれなりに動いてもらわないと困りますから。剣ぐらい振るってもらわないと。ああ、熱い熱い」

魔王つて人に害成す存在で、魔王が現れるとともに勇者の剣が勇者を選んで、勇者が魔王を倒す、魔王は勇者の剣でしか斬ることができない、ではなかったのだろうか。

どこから取り出したのかわからないが身の丈ほどの大剣を肩に担いだ神官さまがいる。いやいや、神官さま、あなたいったい何者でしょうか。神官さまって剣を扱えるのですか、そもそも神に愛され見目麗しいマルイさまは人よりずば抜けた才能をお持ちではなかったでしょうか。それこそ剣技など必要もないくらいに。

これは、見なかったふりが一番いいんじゃないだろうか。デューイといることで鍛われてきた、空気を読むことをいまここで発揮してくてどうする！ と直感が告げ、背を向けようとしたけれどあとすこし早ければ。

消えゆく魔王が口悪く罵る、耳障りな声が届く。

ああ、やっぱりそれって。

「デューイ様、おめでとぅございます」

「終わったの？」

「ええ、すべて終わりましたよ。城へ戻り姫様、いえ陛下へ報告に」
すべてが白々しく聞こえるのですけど、わたしはいったいどのような反応をとればいいのか。テオトバルトさんはわたしの視線の意味に気づいていないのか答えをくれることはなく。ヨシユカさんに至ってはロイロイロイ、と呪術のごとく唱えている。

「サラ様、お手を」

差し出された手の期待するところはわかるものの、このまま乗せてしまえば、予想外の方向へ転がりそうな。いや、ある意味予想通りというべきか。

「サラ様戻ったあかつきに、私と……」

声が聞こえなくなっただのは、きっとヨシユカさんが転移魔法を施行したから。

決して、わたしが意識して聞きたくなかったわけではない、と思いたい。

05（後書き）

戦闘描写？なにそれ？このお話に必要なもの？なテイストです（笑）

これは大団円と言っているのだろうか。

今宵、王城で行われるパーティを思う。あちらこちらでデュイーと姫さまの名前が囁かれる。それはおかしいことではない。

しかし、魔王討伐は数ヶ月も前の話で、今のいままで王城奥深くでひっそりと暮らしていた。外に出ることを禁じられているかのような物々しい警備の中。家に帰ることも許されず、接触できたのは突っ込むことすらためられる見目麗しい神官さまのみ。

そして帰還後初の外界との接触で、その意味を知る。

世界情勢が傾きつつあるなか、魔王が現れたことが囁かれ、それを裏付けるかのように勇者の剣が神殿に姿を現す。勇者の剣が多くの人々の中から勇者を選び、選ばれた青年は世界の平和のためにと立ち上がる。数少ない従者を連れて危険な旅へと向かう。いくつもの困難を超えて、魔王城へとたどり着き、ついには魔王を打ち倒す。世界に平和が戻ったことを王へと伝え、勇者である青年は褒美にと珠玉の宝ともいえる姫を娶り、次期国王になるに違いないと噂されている。

吟遊詩人が各地を歩き、勇者デュイーの物語を唄う。

どこか違う！ 全部ちがう！

詐欺だ！ と訴えたいけど、いったいどこに訴えればいいのか。陛下がそれをよしと認めたのであれば意義を唱えることなど至難の業である。

「勇者ってこれでいいのかしら」

「もちろん構いません」

「まあ、民衆には魔王がいなくなって平和に暮らせることが1番重要なことだけど」

「お話が早くて助かります、サラ様」

またどこかで聞いた台詞をのたまう神官さま。話題の神官さまがこんなところにいていいのかしら、と思うが突っ込むまい。わたしの気力が奪われるだけだともう学んでる。

「ねえ、ヨシカワって」

「なんのことでしょう？ サラ様」

いきなり体感温度が下がった気がして地雷を踏んだことに気づいた。

ヨシカワなんて家名は珍しい。それどころか今現在ヨシカワの家名を名乗れるのは本家のそれも直系しか名乗れないことになっている。つまりは、いつも私の目の前にふらりと現れる神官さまは、あのヨシカワ家のそれも直系であるというわけ。

やっぱり、タケル・ヨシカワの直系で、確実にその血を引く、勇者さまってことよね。お飾りの勇者さま、デューイとは違う。

でも、勇者の剣の選定はいつたいていどういうことなのかしら？

「サラ様、そんな情熱的に眺められたら……」

「ちょ、ちよっと待って！ 情熱的って」

「そうですね、確かにこれではお話が進みません。それで、私たちはいつにいたしましょう？」

「『わたしたちはいつにいたしましょう？』」

「ええ、姫様とデューイ様の次に」

——世界に平和が戻ったことを王へと伝え、勇者である青年は褒美にと珠玉の宝ともいえる姫を娶り、次期国王になるに違いないと噂されている。

そして一の従者であり、勇者の出現を予見し、勇者タケルの血を後世へとつなぐ神官は、身を挺して守った一人の女性と恋に落ち、その手に幸せを掴む。

二の従者の剣士は、その名を残しながらもその後の歴史に名が出てくることはなく、剣を持って王へと仕える。

のちに歴代最強とまで謳われる三の従者である魔術師は、その歸りを信じ一途に、信頼を持って待ち続けた婚約者と添い合った。

やっぱり、違う！ 全然ちっがーう！

【END】

06（後書き）

誰が何と言おうと完結です！

婚約者は勇者さま？……タイトルに偽りないですともツツ！

そのうち補足的に番外編でも書きたい、が予定は未定。

「お邪魔しています、サラ様」

1日の疲れにぐったりとしながら部屋に戻ると、あたかも自室であるかのように寛ぐこの世の美を集めたかのように華やかな神官さまがいらつしやる。なぜいるのかなんて突っ込むことは体力の無駄である。あきらめて受け入れるしかない。

「お疲れでしょうから、ティータイムでもどうですか？」

ティーセットがどこからともなく現れ、美味しそうな匂いも漂ってくる。こんなことが日常になりつつある現状に、感覚がマヒしつつあることに気づいた。

「もうお聞きでしょうが」

「世継ぎのことですか」

「お話がはやくて助かります」

もう聞き飽きた掛け合い、慣れたものだ。国の中枢を担う神官さまと一介の商家の娘がこのような馴れ馴れしく話すことからおかしいと言え、そうなのだけど。

「ということ、どれにします？」

ぞろぞろと入ってきたのはウチで雇っている女中たちで色とりどりの装飾のついたきらびやかなドレスたち。以前のわたしであればウチよりもいい布をつかつてる、なんて僻みのような思いも浮かんだが、いま、出世したともいえるわたしのおかげでストーニー商会は箔がつき、商家の格が上がったと言える。

きつと手触りのいい布を見ても、これくらいウチでも見れるわっ、おほほほ。と言えるくらいには。

っと、脱線したけど。

「いやいや！ なんのことですかといいたい。けど、けどっ！ わかりたくもないけど、わかってしまうこの察しの良さ！ 自分でも

惚れ惚れする！　ってことで神官さまお引き取りください」

「そんなこと言わずに、これとかどうです？」

「ぎゃー、なにそれなにそれ！　むりむりむり！　というかあなた！　含み笑いやめなさい」

「そうですか、サラ様はこういうタイプがお好み、と。ではお願いしますね」

まじめに頭を下げたのにもかかわらず、見事に聞いてやしない。わたしのなかの神官さまの好感度、初対面から悪いものだったけど、そこが知れない。落ちる落ちる。

わたしがわーわー喚いているあいだに勝手に自己完結してしまつた神官さまはそばに控える侍女に手渡してよろしく頼みます、と言つて消えた。

そう、消えた。残されたのは焼き立てで美味しそうな匂いが漂うお菓子とティーセット。

ウチに仕える者たちでさえ見慣れてしまった光景。喚くわたしをしょうがないお嬢さまですね、とでも言いたげな目で幼少期より仕えてきた侍女はみる。仮にも主であるわたしをそんな目でみない、含み笑いしない！　そのドレスがわたしにどれほど似合わないかなんてわたしが一番知ってる！。

「デューイ様らしいですわね」

その言葉にわたしがこうなる原因がすべて詰まっている。こうなる、とはもちろん。

「やめてやめて、マリア！　服を引っ張らないで」

「マルイ様に頼まれましたからね、今宵のパーティーの主役はお嬢さまですからね！」

鼻息荒くキラキラひかる目の奥に見える怪しい光に着せ替え人形になることは逃れられそうにない。

今宵の主役はもちろん、半年前に盛大な結婚式を挙げ、どう計算

しても合わない、のちの世継ぎとなるに違いない王子を生んだ姫様
とデューイでしように、と。内心突っ込んでみた。

01（後書き）

その名の通り追いかけてこ編。
数話で終わる、はず。

補足的な番外編はまた今度。

背中が寒い。コルセットがきつい。上げ底された胸が窮屈。不躰に寄せられる視線が不愉快。どれもこれもすべてあの胡散臭い神官さまのせいに違いはない。

わたしとは天と地とも違う人たちがおほほほ、といくつもの猫をかぶっている姿をみてげんなりする。貴族って怖い！ いえいえ、デューイとどこかのご令嬢が柱の陰で口に言えないことをしていたなんて言えるわけがない。いえいえ、わたしなにも見てませんとも。エスコート役を名乗り出た、というか勝手にわたしを引きずってきたともいう、神官さまはこの大広間に入るなり姿を消した。今度は比喩的な表現ですとも。声を潜めていても、それが幾人もの声になれば耳に届く。

あたりは見知らぬ貴族さま。唯一の神官さまは頼りにならず、というか頼りになるのが神官さまってところがいや。誰か誰か！ と見回しても客として見る貴族さまはいるものの進んで輪に入れるほど図々しくもない。

予想通り、わたしは壁の花となるしかない。時折目の前を通るボーイからワイングラスを拝借し、のどを潤す。

やや、これはガルツ産のシャンパーニュ？ さすが王城、こんな一品が無造作に配られるなんて。

「今宵は一段と美しくいらつしやる」

ワイン漁りでもしようかとボーイを探すわたしに聞きなれない声が届く。振り向いても見知らぬ顔。無駄にキラキラしところが元婚約者に似ていると思った。

「えっと、どこかでお会いしました？」

店の客なら忘れもしない。このような場にでるということは貴族

さまだろうし、金づる……失礼、いいカモ……失礼、上客の身分とご尊顔は忘れません。

「貴方の美しさに僕は一目で恋に落ちてしまいました、どうか僕と一曲踊っていただけませんか」

きつとこの笑顔はこの男の最大の武器に違いない。けれど、見目麗しい人間にどうやら縁のあるわたしにとっては無意味なもの。この軽い男はなんだ、とわたしは顔をゆがませていたに違いない。それが伝わったのか、目の前のキラキラした貴人は腕を組んだ。

「んーおかしいな？　これで落ちない女の子はいないはずなのに」
そんな発言、女性の前ですべきではないと思いますけれど。人を不愉快にさせるのが上手だわ、と立ち去ろうとしたけれど。

「ロ……イ……」

どこかで聞いた名前だ、と足音を立て、怒りあらわにドレスの裾を持ち上げて駆け寄るヨシユカさんを見つけて気づく。

「ああ、節操なしの」

聞くに違わず、タラシな人だ。納得した。確かにこの顔で甘い言葉を囁かれればその気になる令嬢もいるだろう。ただでさえアバンチュールは恋のスパイスというもの。

「あなたがロイの申し出を受けるかとひやひやしましたよ」

ヨシユカさんのやっぱり聞くに堪えない言葉の応酬にたじたじになる貴人を見る。どうやらロイと呼ばれる節操なしの貴人はデューイと同じ人種のように、違うのはその立ち回りのようである。バチバチと火花を飛ばす娘たちが多数いる。中には人妻であるう、女性もいる。

関わり合いになりたくない。と首を振ってその場を離れようとしたけれど、目と鼻の先に立ち尽くす神官さま。いや、礼装をしている。これじゃあ神官だと思えない、どこかの貴族さまのようだ。

鋭い目つきに怯む。本能で一步二歩と後ずさる。その数歩の隙間さえ埋めて近づく神官さま。ぞくりと背筋に走る違和感、なんだかお

かしい雰囲気を出していらっしやるけど――？

「どうして逃げるんです？ サラ様」

「近いですし、マルイさまが近付くからですわ」

「いえ、先に下ったのはあなたのほうでしょう。それに、」

本能が危機を訴えているからよ！ と叫んでみたい。しかし常に冷静であれ、とのお父様の教えに忠実に一つ深呼吸をする。

さきほどまで行われていたヨシユカさんとロイさまの痴話喧嘩は収まり――！ 見てはいけないものを見てしまった気がする。一つの男と女の愛憎劇が終わり、新しい見世物に興味津々の紳士淑女のみなさまがいる。あたらしいとは、すなわち。

「逃げられると、追いたくなるでしょう？」

ひっ、と喉の奥で小さく悲鳴があがる。その目に映るわたしの顔を見てさらに青ざめる。

これってまさしく貞操の危機ってやつかしら。

冷や汗が垂れるし、背筋がぞわりと泡立つ。

「え、あ、や、き、きき気分が悪いので」

ゆっくりと後ずさり、その距離を埋める様子のない神官さまをみて、わたしは脱兎のごとく逃げだした。

この城に逃げ場などないことは冷静ではいられないいまのわたしにとって思い至るはずもなかった。

02（後書き）

その背後で神官さまはきつとペろりと舌なめずりをしているに違いない（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0223x/>

婚約者は勇者さま？

2011年12月5日21時54分発行